

## 松岡先生に贈る言葉

岡村 久和

亜細亜大学都市創造学部 教授

2015年春、亜細亜大学都市創造学部と言う新しい学部が出来るという事で、光栄にもその開講の一年前に学部を作って行くというプロジェクトがスタートしました。松岡先生の事は間接的に聞いておりましたが、もちろん写真を拝見するだけでお会いした事はありません。私は父が建築設備設計を行っていた関係で、何となく建築家という人々の事はわかったつもりでいました。他の職業の人とは一線を画し、他人の事はあまり考えず、一つの事に没頭するタイプの人たちかな、そんなイメージがありました。松岡先生のお写真から創造したのは、そんな建築家で、私の中では黒川紀章のようにとっつきにくい難しい人なんだろうと勝手に想像しておりました。

その春のある日、もう建物は無くなってしまいました。旧一号館のエレベーターに乗らんとされている松岡先生にお会いする事になったのです。後ろ姿からはまだ気難しい建築家の雰囲気は漂っていました。ところが顔を見合わせたその瞬間から、私の松岡先生の優しさと暖かさが私の悪しき勝手なイメージを一掃してくれました。こうして、松岡先生との出会いから仕事が始まりました。

2016年春、私にとって生まれて初めての教員生活が始まりました。それまで30年以上勤めてきた企業とは全く違う畑での、さらに60歳になってからの新生活です。しかし、その私に新しい生活への不安は全くありませんでした。前年からの学部を作るプロジェクトを通して、松岡先生、後藤先生などと心一つになったと感じていたからです。

今から思うとずいぶんと難しい局面を抱えたまま新学部が発進したなと感じますが、当時は楽しい事ばかりが毎日続くという感覚で過ごしていました。これは正に松岡先生の存在によるところが大きくあったのです。建築設計に携わった父の門前の小僧で設計は見ておりましたので、折に触れては松岡先生と建物の話を

させていただきました。またスターウォーズや模型、造形の大好きな先生のご趣味は私のそれと大変近く、趣味そのものよりもその裏にある哲学から子供の頃に没頭した模型作りまで、幅広い視点での楽しい無駄話でも時間を過ごしました。

これらが私の新生活への不安を大きく包み込んでくれていたおかげで私の新生活は暖かく始まって行ったのです。

新しい学部は、全く何も知らない一期生の学生の人生を、何も知らない一期生の教員が担うというリスク満載の学部でした。初めて出会いの広場に学生を連れて鬼怒川で初めての教員の先生方と夕食を共にし、そして授業が始まりました。6か国留学の準備のほかに、慣れない学生の戸惑いから起こる問題や、右も左もわからない私たちに求められる様々な決断が毎日の様に求められる事などが続いていきます。しかし、常にそこに笑顔でいらっしゃる松岡先生がおられ、本当に何と心強かった事でしょう。

2016年の一期生を受け入れた時には新教員全員が本当に真剣に頑張っていた事を良く覚えています。既に学生は入学している訳ですが、教員のほぼ全員が初対面かつ、それぞれが一体どんな方々なのかも知らないままです。今でも鮮明に覚えています。一人一人の教員のこれまでの経歴や得意分野について毎週集まって紹介を続けるというプログラムを毎週回していました。松岡先生のこれまでのご経歴や作品の紹介、そして新入学生に教えたい造形への思いなどに、建築家と言うよりも都市に対する芸術家であり学生をこよなく愛される教員の面を強く感じた事を覚えています。ビルの設計の何たるかは何となくつかんでいた私ですが、ビルや建物の設計に強い芸術性や設計者の人間としての思いがある事はそれまで余り意識していなかったので非常に新鮮で刺激的でした。

学生は一期生150名しかおらず、教員はほとんどが新

人と言う環境の中、良く留学を含めた複雑な学部運営に従事出来たと今でも不思議に思います。松岡先生がいつもすべての教員をフラットに見ておられ、すべての教員との会話を常に心がけておられたからだと感じています。

2017年に入って一期生と二期生の合計で300名の学生がいる組織になりました。一期生は後輩が入ってきた事で少しプライドも生まれ、大なり小なり様々な問題が次々と生まれてくるようになりました。しかし新しい学部として音を上げる訳にはいきません。やはりこの年も教員の一体感は松岡先生のおかげで常に保たれていたように思います。そしてこの2年目に早速留学が始まりました。初年度の新生と新人教員でのバタバタ運営がすぐに6各国への留学送り出し運営に変わっていくのです。留学先での就業体験先企業を探すという命題は大学の誰に頼む訳にもいかず、教員自身が海外まで何度も何度も出かけて解決しました。本当に皆さん良く頑張ったと思います。一方で海外留学に出られない学生は国内就業体験を行う事になるのですが、ここに国内の就業体験受け入れ企業が新たに登場するのです。新生、新人教員これに加えて新しい協力企業が現れて来たのです。国内就業体験は主に海外からの留学生が対象だったのですが、たった1年少しの経験で国内就業体験企業に留学生を送り出すというある意味無謀な取り組みも始まりました。松岡先生が直接携わられた件でも様々な事柄が続き、大変苦労されていたのも覚えています。

そうこうしているうちに、私たちも少しずつ慣れていったのですが、ある日突然本当に悲しい出来事がおこりました。松岡先生の奥様が急逝されたのです。新しい学部で少しか慣れてきた時期でしたが、私は心の底から「どうしてこんな事が起きるのか」と何度も天に尋ねていた事を覚えています。表面的には自分で何とでも取り繕う事で、松岡先生にそれなりの言葉をかける事は出来たのですが、先生の本当の悲しみなど、私には到底理解できない事は十分に理解しておりました。私がこれまでの自分の人生で感じたどんなにつらく悲しい事よりも松岡先生のこの悲しみは深く辛い物であったと思います。決して他人の私が共有できる事ではありません。また時を置かずして療養中のお母様も急逝されました。世の中にこんな事が本当にあるの

だろうか？ともううまく言えない感情で一杯になっておりました。

それでも学部の仕事は進みます。留学に行く学生も増え、新しい課題が日々生まれ、沸いてきます。松岡先生のご事情など無視するように次々と難問が生まれてくるのです。毎日毎日一生懸命授業は進み、学生は成長していきます。一方で解決すべき課題も学生の関連から予算までどんどん積みあがっていきます。そんな中で松岡先生ご自身は本当に辛い思いを消す事などできない中、相変わらず教員は松岡先生を頼って頑張っていたのです。今思うと、松岡先生がこういう時期にも拘わらず私たちを常に暖かく受け入れて頂いていた事が、今の都市創造学部の基礎が出来た最も大きな理由だと確信しています。

時が経ちもう7年目が終わろうとしています。思い起こせばオーストリア、シンガポールとご一緒させていただいて良い思い出もたくさん頂きました。3月には台湾をご一緒しました。もちろん沢山の素晴らしい学生も送り出す事ができました。しかし、最も大きな問題が解決していないのです。松岡先生に何一つ恩返しをしていない事です。いつもいつも頼るばかりで、何一つお礼を返した記憶がありません。人間として恥ずべき事だとわかりつつも忙しさにかまけて何もしていません。

そうして今日とうとうその時が来てしまいました。

松岡先生がいらっしやなくなる時が近づいています。これまで当たり前の様に思っていた世界が変わろうとしています。私にとっての先生は師匠でもあり、失礼ながら友人でもありましたが、それが毎日会えなくなってしまう時間がもうすぐきます。

何を言っても松岡先生へのこういった感謝の気持ちをうまく表現できないのですが、これからもずっと一緒に人生の時間を時々共有できると良いなと心から感じています。

松岡先生、8年間本当にありがとうございました。先生にとっては公私共にまたまた新しい世界に飛び込まれる事になると思いますが、是非お体にもご自愛いただき時々ご一緒する時間を頂けると幸いです。今後のますますのご発展とご多幸を心よりお祈りいたしております。

ありがとうございました。